

ジャーナリスト清水安三の中国論とその今日的意義

高井 潔司

Journalist Yasuzo Shimizu's Theory of China and Its' Significance Today

TAKAI Kiyoshi

桜美林大学

桜美林論考『言語文化研究』第8号 2017年3月

The Journal of J. F. Oberlin University

Studies in Language and Culture, The Eighth Issue, March 2017

キーワード：大正デモクラシー、五四運動、北京週報、中国論、現場主義

Abstract

Yasuzo Shimizu, founder of Oberlin University in Tokyo, established Chongzhen School in Beijing before the start of the war between Japan and China. As a journalist, he commented often about the relationship between Japan and China while he managed the Chongzhen School. In the 1920's, the period of the Taisho democracy, he interacted with Chinese leaders of the reform movement such as Li Dazhao and Lu Xun. This interaction assisted in the creation of his unique theory, which attached importance to the hands-on approach principle, equalism, inter-nationalism and humanitarianism. Most common theories about China in Japan during this era opposed Shimizu's theory. The general assumption was that China was a nation that lagged behind other nations and it would not reform itself domestically. During the 1930's, because of the raise of militarism, Shimizu was restricted to speak openly concerning his theory so he had to limit his theory commentary in order to manage and develop the Chongzhen School. Some researchers commented that this change was due to mental weakness and a lack of strong will. However, that criticism is not correct if they analyze the components of his theory such as background, collecting data, writing and editing. Nevertheless, he suffered through the consequences of his own remarks. From the 1930s to the period that Japan was defeated in the war, his theory was based on the fact that he had an objective point of view that included looking back on him and Japan. Based on similar approaches to China today, his theory of China still has significance.

要 旨

桜美林学園の創立者、清水安三は戦前、北京において学園の前身である崇貞学園を創設、運営する一方で、ジャーナリストとして中国、日中関係などに関する数多くの評論を残した。大正デモクラシーを背景に、1920年代、李大釗や魯迅など中国の革新運動のリーダーたちとの現地での交流を生かし、現場主義、対等主義、国際主義、人道主義を基調としたユニークな中国論を展開した。当時の日本における主流の中国観は内部から革新の動きなどあり得ない遅れた国というイメージであり、清水が北京で形成した中国観とは対照的であった。だが、30年代、軍国主義の台頭の中で、清水も自由な発言が封じられただけでなく、学園の維持、発展のために、「大陸文化工作者」としての発言を余儀なくされた。研究者の中には、その変化を「日和見主義」と批判する論考もある。しかし、清水の中国論が生まれた背景、彼自身の取材、執筆、編集のネットワークを分析すれば、そのような批判が適切でないことがわかる。30年代から敗戦に至る段階においても、彼の中国論には、事実から出発し、自己や日本をも顧みる客観的な姿勢が貫かれていた。そのために舌禍事件にも巻き込まれた。その姿勢にこそ清水の中国論の今日的意義が存在する。

1. 問題の所在

桜美林学園の創立者、清水安三は戦前、北京で宣教師として布教活動と貧民支援の教育事業を展開するかたわら、ジャーナリストとしておびただしい数の中国、日中関係に関する評論を残している。中国革命の真ただ中で、現地での生々しい体験、中国の第一級の人々との交流、インタビューを通した彼の中国評論は当時、一部の中国研究者から高い評価を受けた。とりわけ大正デモクラシーの影響の下、現場主義、対等主義、国際主義、人道主義の立場から自由闊達に繰り広げた彼の中国評論は貴重である。だが、軍国主義の台頭の下で、歯に衣着せぬ彼の言論活動は長く続かなかった。次第に活躍の場を失い、表舞台から姿を消していく。それでも彼の言論活動は、日米開戦前夜まで続き、教育事業資金の募金を進めていたハワイで、舌禍事件を引き起こすまでに至っている。戦時下においても日支親善を説いた彼の言論活動が辿った足跡を振り返ることは、1972年の国交正常化以来、最悪の事態を迎えている日中関係の今後を考える上でも示唆するところは大きい。清水安三の中国をめぐる評論活動は、軍国主義の台頭から日中戦争、太平洋戦争の勃発によって変化がなかったわけではない。その変化をしっかりと跡付け、当時の日本の対中世論や日本のマスコミ、研究者の中国論と比較する中で、清水安三の中国論を位置付けし、その今日的意義を明らかにしていくのが本論の目的である。

2. 資料・先行研究と本論の視角

まず清水安三自身の著作、評論の数々を、復刻版という形で、子息の畏三氏が近年、自費出版されている。このうちジャーナリスト活動に関わるものとしては、『日本の対中国政策を激烈批判——ジャーナリスト活動（一九一九～二七）』があり、畏三氏の編集によってこの時期に清水安三が雑誌『我等』、『基督教世界』、『北京週報』、『読売新聞』に執筆した約150編の評論、記事が収められている。『北京週報』は同名の雑誌に戦後発行された中国の政府広報誌があるが、清水が執筆したのは、1922年から1930年まで北京で発行されていた日本語の中国時事問題専門誌である。また同時期に出版された『支那新人と黎明運動』（1924年、大阪屋号書店）、『支那当代新人物』（同）も畏三氏によって復刻されている。また畏三氏の編集で、『石ころの生涯』（桜美林学園刊）と題する文集も編まれている。

筆者（高井）はこれらの資料を基に、「忘れ去られた中国問題ジャーナリスト」という論考¹⁾をメディア研究誌に執筆し、清水の中国論の意義とそれが読売新聞に掲載された背景を紹介した。この論考は現在では一般に知られていない清水のジャーナリスト活動の紹介に追われたため、同時代の日本の中国論との比較や彼のユニークな中国論の生まれた背景に十分触れることができなかった。また軍国主義の台頭と彼自身の多忙な教育支援活動のため、清水の言論活動はその後著しく少なくなったが、それでも細々と継続していた言論活動について全く触れていなかった。

しかし、今回、桜美林大学の樽松かほる教授が所蔵していたハワイの新聞『日布時事』のマイクロフィルムを借りることができ、1940年1月から2月にかけて、清水の評論およびハワイでの講演記録など40編あまりの記事を閲覧することができ、清水自身の中国論の変遷もかなり明らかにすることができた。また北海道大学の西茹准教授の協力で、同大学図書館所蔵の1930年代半ばの『中央公論』に掲載された清水の評論も読むことができ、ジャーナリスト清水の全体像により近づくことができた。

清水の生涯を取り上げた評伝には、『朝陽門外の虹』（山崎朋子、岩波書店、2003年）、『清水安三と中国』（太田哲男、花伝社、2011年）がある。前者はサブタイトルに「崇貞女学校の人びと」とあるように、清水の教育活動に焦点が合わされている。後者は中国における清水の様々な活動、業績が詳細に論述されており、大変参考になった。第6章には「ジャーナリストとしての清水安三」も論じられていて、もはや付け加えることは何もないほどに詳細に描かれているが、畏三氏の復刻版同様、戦中から敗戦の間の評論活動についてはあまり触れられていない。ただ太田氏の著作から、2000年11月に桜美林大学で開かれたワークショップで栃木利夫・法政大学教授が「中国現代史と清水安三——その同時代認識と現代への課題」、オーシロ・ジョージ桜美林大学教授が「戦前期における清水安三の国際主義と愛国心のジレンマ」をそれぞれ報告されていることを知った。これらの報告は清水の中国論の全体像を理解する上でまた別の視点を示唆してくれる。栃木報告は戦時中の清水の中央公論に書いた論文も分析し、彼の中国認識、革命情勢に対する認識の変化を指摘している。だが、栃木氏自身認めているように清水のユニークな中国認識の背景分析は不十分であり、本論文ではこの点を補っていきたい。

清水の中国論の生まれた背景、同時代の中国論との比較にあたって参考にした文献は文末に一括して掲載した。ただ一つの論文だけここで紹介しておきたい。山下恒夫「薄倖の先駆者・丸山昏迷」（『思想の科学』1986年9月～12月号連載）である。丸山は清水が北京週報で記者、編集者をしていた時代の同僚である。戦後、清水が執筆した「回憶魯迅」という論考²⁾の冒頭、『魯迅周囲の日本人』と題して、取組み研究するなら好個のテーマでありますまいかと述べて、最初に紹介したのがこの丸山昏迷である。清水は「北京の思想家や文士達に最初に近付いた者は実に丸山昏迷君であって、多くの日本からの来遊の思想家や文士達を、或は周作人さん、或は李大釗先生の家々に案内した者は丸山昏迷君であった」と紹介している。後述するように、清水は丸山から大きな影響を受けている。いや影響し合ったといえるだろう。

丸山は1924年9月、30歳の若さで病没する。清水は「私は米国留学中（1924年～6年）に大切な友人を失った。その一人は李大釗先生、他の二人は丸山昏迷、鈴木長次郎である」と記している。丸山昏迷の北京での活動はわずか五年であったが、ジャーナリスト清水の誕生に大きく関わった。丸山の短い人生と彼の活動に着目したのが、山下論文である。丸山昏迷に関する数少ない論考であり、清水の中国論の背景を考える上でも大変に参考になった。³⁾

3. 中国の新潮流を評価する清水安三の中国論

まず清水安三がどのような記事や文章を書いていたのか、ひとまず簡単に紹介したい。読売新聞や北京週報に掲載された孫文の北伐や五四運動、女性解放運動など中国の新しい息吹についてその積極的な側面に焦点を当て、高い評価を与えている。清水が評論活動を始めた1920年代、日本は列強の一員として中国における権益拡大を図る時期であり、中国を一段低く見て、そうした改革や革命運動を小馬鹿にしていた。これに対し、安三は、中国に対する当時のステレオタイプを排し、現地の動きに密着して物事を論じている。例えば読売紙上で書いた女性解放運動の連載はこういう書き出しだ。

「支那³⁾の潮流は支那大陸の岸洗うことを忘れぬ。支那の四角い文字を読んでばかりいるものには新支那は解りはせぬ。支那は世界の新思潮に動き行く。漢学を甲羅に着けている日本の多くの支那通に現支那が理解出来よう筈がない。世界の新思想は現支那の女青年を動かさないでは置かぬ。わけて最近数年に於ける支那婦人界は全く面目を一新したといっても、敢えて大袈裟ではあるまい。言葉を強めていえば支那4千年の婦人発達史を一挙に覆して新時代を劃したと称し得る」⁴⁾

五四運動をはじめ当時の中国の新しい運動は、「反日」の側面を持っていた。しかし、安三は反日の原因はむしろ日本側にあり、中国の動きは新中国を作る運動へとつながることを見抜いていた。

「日本の軍閥連中は、猶も支那官憲の威嚇に信賴して排日運動を制止しようと考えている。しかし（日貨排斥運動で学生たちの破壊活動を制止するどころか協力加勢する）番頭や巡査兵士連中に、排日感情が胸いっぱいである限り、どうすることもできまい。排日運動の青年学生が捕縛されても、裁判官に排日感情がある間、なんの効果もあるまい。排日者をすべて収容するには、四億の国民を幽閉するだけの留置場または牢獄が必要になるかもしれぬ。北京の遊街会と称するデモンストレーションを一度でも見たものは、民衆の力を今さらのように感じるであろう」

「東洋において、無抵抗主義の戦闘が日本に向かって行われている。朝鮮における万歳運動、支那における排日運動がそれである。彼らは兵器を持たぬ。彼らは人殺しをしようとは考えぬ」

「拳銃で脅かす者に対して、いわゆるハンドアップで無抵抗、両手を上げたらどうなるか、朝鮮人支那人はそのハンドアップを以て殺伐なる日本軍人に対抗せんとしている」

「強敵の前に無限に強い日本軍人といえども、莞爾として空手で手向かうものを打つことも殺すこともできまい。日本刀は目に見えぬ真理を断つには、あまりに切れ味が悪いということである。今にして日本人が考え直さねば、日本人は世界の人間から仲間はずれにされるであろう」

じきになるに相違ない。孤立の国家が亡ぶか亡びぬかは、具現者が一寸考えれば解ることである」⁵⁾

この時期、清水が多くの評論を書き、活躍の場となった『北京週報』は1927年、軍部の圧力によって実質的に停刊となる。清水が書いた最後の記事では、「私は過去十年の間、北京においていつも、身を左端に置き、常に叫び続けてきたのである。ある時は国賊視され、ある時は過激派と罵られもし、馬鹿と言われ、狂人と扱われた。しかも私はかつてかく言われることを悔いたことがないのである。私が国賊視された理由はどこにあるのか。非国民として罵られた理由はどこにあるか。それは言うまでもない。私に一つの国際精神があるからである。私には日本民族を愛する心は十分にある。けれども同時に隣国支那の憂えを、わが憂えとなすだけの心持ちを持っている。故に人が支那を悪し様に言うと、実に腹が立つのである。この精神があるために、私はいつも支那を責めるよりも、日本をなじることが多い。他に対しては寛、己に対しては厳たらんと欲する」⁶⁾

清水は大原総一郎の支援で1924年から26年にかけて米オベリン大学に留学しているが、その体験を通して欧米に対する偏見も克服できたと回想している。こうした中国の新たな動きに対する前向きな評価、日本の軍国主義への批判は、当時、大正デモクラシーの旗手といわれ、中国に関する数々の評論でも知られる吉野作造と多く共通している。後述するように吉野は清水の中国論を高く評価する。ただし清水の評論の多くは逆に吉野の影響を色濃く受けているとも言える。

清水や吉野の中国論は、当時の日本では決して主流ではなかった。『吉野作造選集7』の巻末解説（狭間直樹）に面白いエピソードが出ている。京都大学附属図書館に吉野作造が寄贈した『支那革命小史』があり、狭間氏によると「その『弊政改革』云々の部分に鉛筆で傍線が引かれ、欄外に『弊政改革ノタメノ革命運動ナド支那ニアツテ堪マルモノカ支那ニタイスル甚シキ認識不足』と達筆で書き込まれている」という。狭間氏は「中国人の改革能力を確信してはばからない、時流に抜きこんでた吉野の見解には、当時からかなりの批判が出されたい」とコメントしている。

当時、この京都大学の教授であった漢学者、内藤湖南は、中国の改革やその前途をめぐって吉野と論争を繰り広げていた。当時の中国論の研究にあたって、清水と内藤を対立軸に据えて論じた興味深い論文もある。⁷⁾ 狭間氏は「書き込みが何時のものかはわからないが、その語勢からなんとなく刊行当時の憤慨の趣が感じられる。この書き込みが吉野の観点を真っ向から否定する。支那人に宿弊改革能力なしとする、その意味で内藤の側に立つ、当時の時代思潮の主流ともいふべき見解の吐露であることにまず疑問の余地はない」と指摘する。

先に紹介した清水の読売「女性解放運動」の連載の冒頭では、清水自身も、「漢学を甲羅に着けている日本の多くの支那通に現支那が理解出来よう筈がない」と述べ、内藤湖南をはじめとする国内の保守的な中国論への強い反発を持っていた。このあたりにも吉野の

影響がうかがえる。

山根幸夫(1968)は内藤と吉野が「当時の日本においてはもっともよく中国を理解し、中国に親近感を持っていた中国研究者」としながらも、両者の中国観はかなり対照的だった」として、辛亥革命と五四運動の二つの事件での二人の見解を比較分析している。ここでは清水の中国論と関連するので、辛亥革命の比較のみ紹介しよう。

内藤は「辛亥革命を清朝統一政権の崩壊」と認め、清朝の滅亡は「数千年来の君主独裁制による積弊」の結果であり、不可避のものであったと考える。しかし、彼はこの革命を醸成した原動力としての孫文・黄興らの革命派(中国革命同盟会)の勢力を認めようとはせず「革命党などの様な一時に勃興した勢力は、日ならずして衰滅に帰するやもしれぬ」と評価しない。その上で、「中国が軍閥対立の状態に陥ると、『支那見たやうな国は自ら自分の位地を真正に知悉したならば、政治も経済も世界各国に共通して開放する方が、却って自分の独立を確保する所以であるので、些々たる体面論などを喧しく言ふのは、全く日本などのヤリカタにかぶれた最も愚なる政策である』と断言し、中国人民の幸福のために、列強と共同して都統政治を布くことを提案する」という。「都統政治」とは中国が独立国として国家を経営する能力を有しないから、国際社会の「共同管理」の下に置くと言う考え方だ。

これに対し吉野の『中国革命小史』は『最近二十年に互る支那の革命運動は、謂はば新支那誕生の生みの苦みである』、『中国革命小史は実に支那民族復興の努力を率直に語るものたると同時に、又何故に著者が支那民族に敬意を表するか理由を説明するものである』として、清末における革命運動が抬頭した必然性を認め、革命の正当性をはっきりと述べ、これこそ中国民族復興の途だと考えている」という。

清水が吉野と同じ立場に立っていることはいうまでもない。「支那共同管理論の検討」(『我等』1921年11月号)では、内藤の名前も挙げて共同管理論を批判する。ただし、この論文の基調はこれまで紹介したほどの明快かつ論理的な批判ではない。中国側にその自立の可能性、方向性も見えないからだ。

「支那を知れる者の過半、或は殆ど全部は支那人の政治的能力を悲観し、絶望する。澎一湖の如き新進思想家すら、所謂新支那の青年達を悲観してゐる。『彼達とても天下を取れば、五十歩百歩の官吏だろう』と言うていた。現代の文明国のやっているような政治を行うは支那人に取って余りに不得手であるらしい」と、当時の中国の政治の混乱には清水も一定の同意を与える。

しかし、共同管理論にも弱点があると指摘する。「共同管理論は二つの仮定の上に立っている。一つは各国の現在政治が理想である如く仮定していることである。ベルトランド・ラッセルが『支那ばかりが改造をようするのでなくって、支那は世界と同一なる原理の下に改造を要するのだ』といった。今一つの仮定がある。それは共同管理がやれるという自信、或は自惚が立論の基礎になっていることである。果して各国が共同出来るか、それは最も疑問とすべきところである。英米日仏、各々支那に対する関係を異にしてい

る」。つまり共同管理するという国も決して理想的な政治を実現しているわけでもなければ、各国の共同管理論には思惑の違いがあるとの指摘をしている。

その上で「何故に共同管理に反対するか。私等の結論は簡単である。それは支那人をして生みの悩みを自ら味あわせて、支那人らしい文明を建てさせたいからに過ぎぬ。国際共同管理に依存はない。けれども支那は支那人のものである。世界の凡てが共同管理の下におかるまでは、支那を矢張独立国として置きたい。国際心の発展に伴う結果に非ざる傲慢なる態度に依って支那を殺したくない」と、中国への同情論が先に立つ。

こうした同情論は、後に見るように後年、中国情勢がますます混乱し、日中戦争が勃発する頃には、日本の指導の下に欧米から中国を守ると言ういわば日中の「共同管理論」へと変質していく。共同管理の問題点の指摘はしっかりしているが、中国の自立は期待感の表明であり、可能性を信じているに過ぎない。吉野や清水の中国論にはそうした脆弱な部分も内に抱えていることを見落としてはならないし、のちに清水は日中戦争を是認する立場に立たされる理由がそこにある。

4. 清水中国論誕生の時代背景としての大正デモクラシー

ここから、清水のような反主流の大胆な中国論が当時、どうして日本の新聞や雑誌に掲載されたのか、その時代背景、さらには彼がどのようにしてその中国認識を手に入れたのかについて考えていきたい。まずその時代背景として、大正デモクラシーという時代の潮流と切り離せないだろう。

もっとも「大正デモクラシー」という概念は清水を分析する上で有用だが、一方では注意も必要だ。毎日新聞連載「大正という時代」の中で、佐藤卓己京都大学教授は「大正デモクラシーという歴史用語は政治学者、信夫清三郎の著書『大正デモクラシー史』以来使われるようになりました。つまり『民主主義は占領軍に押しつけられたものではない。日本人には脈々と引き継がれた底流があった』と、戦後民主主義の出自を正当化するために発明された概念でしょう。だから、大正時代の民主主義を理想化して見るのは問題があります」⁸⁾と指摘している。同連載で大井浩一記者は「大正デモクラシーの『民主』自体に、戦時体制につながる要素が含まれていたことが浮き上がった」と補う。大正デモクラシー内部に限界や弱点を抱えていたという見方だ。つまり「大正期にあったものは『可能性として』あったという気がします。可能性ゆえの美しさというか、まだ実現していないものを待望するまなざしの輝きです」（佐藤教授）という。清水の歯切れ良い中国論も、その研究にあたっては一時期の評論だけに目を向けるのではなく、歴史的な変遷の中、それが抱えている問題点、限界も見て行く必要がある。

吉野にせよ、清水にせよ、当時、「大正デモクラシー」という概念を意識していたわけではないが、確かにその潮流の下にあった。国内では政党政治、普通選挙、護憲運動、言論の自由、国際的には協調外交、民族自決権の尊重……。吉野はその旗振り役であり、清

水はそうした潮流の下で言論活動を展開した。その一方では藩閥政治、元老政治があり、言論統制、軍国主義、帝国主義への動きも錯綜していた。

清水の処女論文「支那生活の批判」は雑誌『我等』の1919年5月号に掲載された。その掲載も実は大正デモクラシー人脈の下で実現した。『我等』は日本の新聞紙上最大の言論統制といわれる「白虹事件」(1918年)で、大阪朝日新聞を退職に追い込まれたジャーナリスト、長谷川如是閑らによって創刊された。長谷川は、吉野作造と並ぶ大正デモクラシーの代表的な論客の一人と評価される人物である。清水は1917年5月、中国へ宣教師として派遣されるにあたり、大阪の朝日新聞社へあいさつ回りに行く。大阪朝日で対応した記者が長谷川だった。その雑誌に論文を送ったのである。ただし、中国行きにあたって清水が長谷川に約束したのは、原稿の執筆ではなく、学校の建設であった。「ボクはシナ行って二十歳代には小学校、三十歳代には中学校を、四十歳代には高等学校を、五十歳代には大学を建てるつもりです」と語り、長谷川は「私の吹いたホラを、吹いたとおりにかいてくれた」と、清水は回想している。⁹⁾

伝道と学校建設を目指していた清水がなぜ評論活動に入ったのか、彼自身は明確な証言は残していないが、執筆の経緯は、戦後の回想録¹⁰⁾の中でこう記している。

「実はわたしは奉天(現瀋陽)で『シナは国にあらず世界なり』と題する一文を書き綴って、それを懷にして北京入りをしたのであった。わたしはかねて満鉄の図書館へ、しげしげと通って、手当り次第、シナ研究の本を読んでいた。そうしてその研究の収穫がまあいわばこの一文だったのである。わたしはその『シナは国にあらず世界なり』を北京の郵便局から、東京の雑誌『我等』へ発送した。シナ論に限っては特に、『在奉天、清水安三』ではなく、『在北京、清水安三』の方が遥かに重んぜられるであろうと考えたからである」

この一文こそ処女作「支那生活の批判」である。奉天は最初の赴任地で、わずか1年半で北京に移った。その間に横田美穂と結婚生活に入っている。なぜ北京に移ったのか。戦中に朝日新聞社から出版した『朝陽門外』にこう記している。

「わたしが奉天に遣られた、満州で、支那人のために何事かをなしたいという希望があったからである。大阪に広岡浅子という女豪があった。この方が鄭家屯よりもっと奥地バインカラというところに、何千町歩かの土地を買い取って、それを商組し、支那人と日本人とのクリスチャン村を作ろうということを目論まれた」¹¹⁾

実際、離日の日に清水は天王寺の広岡邸を訪問したという。しかし、広岡浅子は1919年1月、逝去した。清水は「広岡邸で見た夢を、はかない世の夢の数に入れはしたもの、この後どうしようかしらと思った。そして早満州に止まってる理由はない。同じく鐘を

つくなら、谷底でついていては駄目。山頂でつかなくてはと希望を新たに抱き直して、北京に移り住むことにした。何をどこでするにもせよ、語学研究が当先の問題である。一、二年みっちり支那語をやることにしよう。それには北京に行くに限る」と書いている。広岡が亡くなった月にすぐ北京に移動しているから、この回想が事実としたら、清水は本当に果敢の人である。北京で投函した原稿は見事、長谷川氏の目に止まった。

「翌月自分の文章が掲載されている『我等』を受け取った時の、喜びったら、筆にも口にも到底言い表せぬ程のものだった。極くわずかであったが原稿料までも送ってきた。ズに乗ってそれからずっと、毎月寄稿したが一回だってボツにならないで皆採用された」¹²⁾

北京では転居早々中国語の勉強に邁進する。「大日本支那語同学会に入れてもらおうやその翌日から支那語と支那事情の研究に没頭した。当時同学会には武内義雄氏がおられた。同氏は後年、東北大学で諸子学講座を担当された文学博士で、おそらくその博学にして実力のあること、日本第1の学者であろう。武内博士ばかりでなく、同学会の小さい狭い部屋に宿れる青年たちは一人残らず勉強家であって、今日軍人としては支那通の少将、中將、学者としては大学教授、そうでなければ高等学校の教師、銀行の留学生は支店長、外務省の留学生は書記官、領事等になっておられる。同学会の空気は今思い出しても息づまるほど、勉強熱に燃えていた」¹³⁾ という。

そこからまた清水の評論活動は飛躍する。次に読売新聞から執筆依頼が来たのだ。

「今度は読売新聞の編集長の丸山侃堂氏から、『シナ当代新人物』と題して、二三十回に亘って連載の文章を書けという注文が来た。そこで私は陳独秀、胡適、魯迅、周作人等を紹介することにした」¹⁴⁾

読売新聞には1921年12月から1923年5月までに新年の連載を含む1年半で37本もの記事を書いている。原稿を依頼した丸山侃堂も実は長谷川如是閑同様、白虹事件で朝日新聞を退社した記者である。当時読売新聞は経営苦境の中で、同じく白虹事件で東京朝日新聞の編集局長を辞した松山忠二郎を社長に迎え再建に乗り出していた。松山は再建に当たって国際報道を重視した。ここでも清水は大正デモクラシー人脈の支えによって活躍の場が与えられる。読売紙上での執筆が1年半で止まったのは、松山の再建策が一定の成果を挙げ、新社屋の建設が完了し、落成式の当日、関東大震災が発生し、再建が灰燼に帰してしまったためだ。この後、元警視庁幹部の正力松太郎が読売に乗り込み、丸山たちは警察官僚の社長就任に抵抗して退社。清水も読売紙上からしばらく姿を消すことになった。¹⁵⁾

北京に移ってから、清水は中国語だけでなく、中国事情の研究に手を広げた。『我等』に毎月のように文章を送りつけたのはこの頃だ。「漢学の素養に乏しい私はいずれの時代の

研究に手をつけても、スキヤクワを持たずに畑を耕すほど至難であった。そこでやむなく手をつけたのが、現代支那思潮の研究であった。そして陳独秀を研究し、胡適の書くものを読み、周作人の随筆に親しみ、魯迅の小説を読みふけり、さては錢玄洞の文字革命などを調べた。そして一冊を書き上げたのが『支那新人と黎明運動』である。それには康有為や孫文の思想までも取り扱った」¹⁶⁾と振り返る。

しかし、清水は勉学に集中していたわけでも、評論活動が順調に進んだわけではない。読売連載が始まるのは北京に移って丸3年後であり、著作が出版されたのはさらに3年後、1924年9月のことだ。この時期、すでに清水のもう一つの大事業である学校建設とその運営が始まっている。むしろ現実との関わり、中国人とのネットワークの中で、清水は中国論を練り上げていった。

5. 現場体験と中国人とのネットワーク

清水が北京に移ったちょうどその年、中国の現代史の起点と評価される五四運動が発生する。清水は現場を目撃し、またこの運動を率いたリーダーたちと直接交流し、中国論を構築していった。この運動は、日本の対華21か条要求に反対し、日本の権益を全面的に認めたパリ講和会議に抗議して、北京の学生たちが反対デモに立ちあがった事件で、排日運動だけでなく、反帝国主義の運動であり、また学生や知識人の民主（デモクラシー）と科学（サイエンス）を普及する啓蒙運動でもあった。

五四運動は清水だけでなく、当時北京に住んでいた様々な人に様々な形で影響を与えた。当時中国には、日清、日露戦争、第1次世界大戦を経て、日本の権益が拡大し、各地に租界も置かれ、北京には1500人前後の日本人が居住していた。外交関係者、新聞社の特派員だけでなく大陸で一旗揚げようという者、中国革命を支援しようと志す者、国内での社会主義運動弾圧で逃げ延びてきた者……様々な人々がいて、運動に対する反応も様々だった。

当時の北京の日本人社会の対中国観や北京駐在の特派員たちの中国報道について、後に満州鉄道調査部を率いることになる伊藤武雄（1964／78～79頁）はこう回想している。

「在留日本民間人の有力者、公使館員、陸海軍駐在武官、正金銀行員たちでつくられた日本人クラブを中心に、北京の日本人社会はかたちづくられているわけです。この日本人は同文同種を口にしながら、欧米人と同様、ここで治外法権を享受して、中国人を見下ろした生活を、悠然と享受していたのです」

「五四運動から二年たった当時、私はまだ知らなかったが、この年の七月には中国共産党が成立しております。一見おだやかでも、すでに変化の前夜であり、波瀾をふくんだ中国の首都北京にあって、日本人の生活が悠長にのんびりしていたのには、新米の私の目には異様にうつりました」

「社会の動きに最も敏感であろうと考え、新聞社の人々との接触にもつとめてみました。日本の特派員のほか、英字紙のノース・チャイナ・スタンダード、華字紙の順天日報という日系新聞社の人々に、五四運動とその後の学生達のうごきについて、質問したのですが、その答は、政客の煽動による政争の具にすぎない、五四のデモは進歩党系の林長民の指導で、交通系との争いに使われたものだということでした」

「新聞記者諸君は、フィクションにしかすぎない中央政府の『逐鹿』的争奪や、封建軍閥の地盤争いの電報は、馬鹿熱心に打っていたが、その混沌の底に流れる明日の中国への動き、こういうものには興味をもたないか、全く気がつかないように思われました」

伊藤の以上のような回想は日本の当時の一般的な中国観を照らし出している。興味深いのは、特派員たちが権力闘争や勢力争いにばかり興味を示していることだ。これは中国の政治を「太子党」と「共青团系」の権力闘争と描く現在の日本の中国報道にも共通している。竹内好（1973／25頁）は、日本人の中国観は「いつも分裂した形が基本になって動いている。軍閥の対立、軍閥と革命勢力の対立、革命勢力内部の対立、さらに思想的な対立までが実体化されて観念されている傾きがある……そしてそれは、今日まだ解消していない」と指摘している。日本人の主流の中国観は戦前も、戦後も、そして現在も権力闘争史観で歪められている。その意味でも五四運動を正面から評価した清水の中国論は貴重な教訓となろう。

伊藤の回想に、清水や清水が活躍の舞台となった『北京週報』についての論及がないのは不思議に思える。それは伊藤が後に師とも仰ぐ中江丑吉、鈴江言一が存在がある。中江丑吉は明治の民権運動家、中江兆民の長男。若い頃放蕩生活に明け暮れ、袁世凱の法律顧問となった有賀長雄博士の助手として北京に来たが、その後も北京に居残り放蕩生活を続けていたという。五四運動の際、自宅で学生たちに襲われた交通大臣、曹汝霖を救出する。かつて曹が日本に留学時代、中江家に下宿していたという関係からだ。この頃から中国研究に目覚め、「中国古代政治思想史」など理論的に精緻な中国論を構築したという。しかし、その作品はほとんど公刊されることがなく、優れた議論も手紙や知人たちとの会話の中にしか残っていない。清水とも何度か接触の機会があった。北京に逃げ延びてきた共産党幹部、佐野学を清水が丑吉に託したということもあったが、彼らとは、研究の目的や生活スタイルが全く異なり、そりが合わなかったようだ。今でも桜美林大学の建学の精神として称揚される「学而事人（学んで人のために奉仕する）」を信条とし、積極的に学んだことを人のために尽くそうとする清水と、有力者の支援を受け、学問のための学問をしている丑吉とは全く意見が合わなかったのだろう。丑吉に心酔する伊藤たちの回想に、清水の名は出てきても「クリスチャン実業家」としか紹介されていない。

清水の中国論は、五四運動を北京で体験しただけでなく、先に紹介した丸山昏迷らとの交遊の中で、李大釗や胡適、周作人、魯迅など五四運動を率いたり、思想的にリードした

中国側の人々と直接、知り合い、意見を交換するチャンスを得たことから形成されている。

清水の『支那新人と黎明運動』に序文を寄せた吉野作造は、①清水君は支那の事物に対して極めて公平な見識をもっている②清水君の論説する所は悉く種を第一の源泉から汲んでいる。書いたものによって其人の思想を説くのではない。直接に氏の書中に描かれた人々と長年親しく付き合っているのである③同君の本書に論じている題目は同君にとって他人の仕事ではない。我が仕事同様の同情と興味を以て取扱っている④清水君はまたその好む所に偏していい加減な事をいう人ではない。悪いことは悪いと憚りなくいう丈の勇氣と聡明をもっている——と、清水の中国論の特徴を挙げて、高く評価している。吉野の指摘は清水の北京における活動ぶりを言い当てている。

ちなみに中江丑吉が高く評価した中国研究者に鈴江言一がいる。『孫文伝』、『中国革命の階級対立』などで知られるが、鈴江も、清水や丸山同様、北京に住むようになってから中国研究に入り、中国人のネットワークを作って、中国の動向を革命の現場からしっかり理解した人である。伊藤は、鈴江が五・三〇事件（1925年）前後に青島の紡績労働者ストを視察し、そこで「最初の中国人労働者の友人蘇兆徴をえたのでした。以来、かれは中国の革命運動のなかで、つぎつぎと友人をつくっていきます」¹⁷⁾と紹介する。中江丑吉グループと清水グループは折り合いが悪く互いに相手を無視しているが、中国に対する向き合い方は良く似ている。

清水自身は前出の「回憶魯迅」の中で、「当時の北京では、阪西公館で小山貞友氏と共に働いていた早大出の鈴木長次郎君、新支那¹⁸⁾の丸山昏迷、それから私自らが何を隠そうラジカルの三羽鳥であった。その頃は中江丑吉氏はまだ勉学などそっちのけの一遊客に過ぎず、鈴江言一氏や村上知行氏等と共に、北京日本人村においてすらまだ名を出してはいぬ人々であった」とかなり彼等を意識しながら、辛口に語っている。

6. 『北京週報』の位置付け——丸山昏迷と清水安三

吉野から高く評価された清水だが、その手法は北京週報の同僚、丸山昏迷から学んだものだ。多くの中国の一流人士を丸山に紹介され、また「丸山に負けず、しげしげ八道湾の（周作人、魯迅兄弟宅）、米糧庫の胡適公館、旧刑部街の李大釗宅を訪れた」（「回憶魯迅」）という。彼らは五四運動をリードする知識人であり、胡適は後に中華民国の駐米大使、北京大学長に、李大釗は中国共産党の創設メンバーとなる。どのようにして中国を代表する思想家たちを訪問できたのか、清水は「いとも聡明にも自分一人で訪問などは減多にせずして、必ず日本からの知名士来遊客のお伴を承って彼らの門をたたいたからであった。例えば、田山花袋や芥川龍之介や、林芙美子、片上仲等と言う人が来遊された時は、八道湾の周宅を訪れたし、福田徳三、服部宇之吉、鶴見祐輔、長谷川如是閑、賀川豊彦、サンガー夫人等言う人が来遊されると胡適を訪れ、佐野学、中江丑吉等言う人を案内して李大釗を訪れたものだ」（同）と記している。

日本からの著名人士の案内はあくまで手段で、彼らの帰国後の作品について清水はあまり評価していない。清水は「在支外人生活の批判」という文章¹⁹⁾の中で、中国では日本人が嫌われ、白人は慕われるとの風潮を指摘した上で、「多くとも、心あるものは愈々日本人自らのちっぽけさと、情けなさを思い当たって、自負自大どころか、恥ずかしさを感じるのみだ」、「実相の支那及支那人はどれだけ理解せられているかは問題である」、「支那人は日本人を遇するに、一種の特別待遇法を以てするようだ。その所謂支那国民性なるものは多く、日本人に対する支那人特殊気質に相当している」、「支那通の支那人観は、あにはからんや日本人の気質を喋々せしにあらざるやとは、年来の私の実感である」と批判的に見ている。つまり清水の目には、日常的な中国人と日本から来る著名人士と接する時の中国人とは、その振る舞いや発言が異なって見えた。それに気付かず独りよがりな中国人観、中国観を持ち帰って、視察談を書いている、だから「白人の支那観と日本人の支那観の差異ある所以はここに起因している」と、清水は批判する。

最近、岩波書店から『日中の120年、文芸・作品選』が出版され、この時代の日中双方の著名人士による中国論、日本論が紹介されているが、清水の指摘するような背景を考慮に入れて読むとより立体的に当時の日中関係が見えてくるだろう。

後年清水は、丸山昏迷論を書いた前出の山下恒夫のインタビューを受け、「中国の作家とか、新進運動の人たちとの交流を最初に開拓したのが丸山君なんですね。どうやって開拓するのかというと、若い丸山君なんかには金がない。そこで、日本から学者なり実業家なりが来た時に、中国の知識人のところへ道案内してやる。すると、その学者や実業家が、今度は中国人側を食事などに招待する。そういう方法を使えば、交際費などもあまりかからんわけです。そして、丸山君が開拓した地盤に、いわばもぐりこんでいったのが、実は私なんです」（前出山下論文）と明かしている。

年齢的には、清水の方が3つ歳上だが、清水がこの時期、言論活動の主舞台にした北京週報でも読売新聞でも丸山の方が先に活動している。丸山は読売に1921年9月から翌年8月までわずか1年だが17本の記事を書いている。清水が1920年代の評論をまとめ、1924年2冊の単行本を大阪屋号書店から出版して吉野の賞賛を受けたが、丸山はそれより3年前、清水らの協力をえて、北京を紹介するガイドブック『北京』を刊行した。これは近代中国を知る貴重な資料として2012年「近代中国都市案内集成第15巻」としてゆまに書房から復刻されている。全700ページ近い大著である。

二人の取り上げている材料も視点もよく似ている。互いに影響し合ったことがよくわかる。魯迅の日記を読むと1923年という年に、丸山や清水が日本人を伴って魯迅宅を訪問したり、食事をしたという記事がしばしば出てくる。しかし、丸山が北京を去り、清水が米留学すると、二人の名前はもちろん日本人訪問の記述もほとんどなくなる。²⁰⁾ 中国の新しい潮流を伝える上で、二人の役割がいかに際立っていたかを示すエピソードである。

ところで、丸山昏迷とはいかなる人物か。長野県の旧北安曇郡八坂村（現大町市）の農家に生まれ、本名は幸一郎。早世したこともあり、彼を知る親族も他界し、その経歴はほ

とんど不明だ。前出の山下恒夫は彼の生家などを訪ね、さらに昏迷の姉の嫁ぎ先である東筑摩郡麻績村（おみむら）の惣宅で、昏迷の20歳当時の日記を閲覧させもらい、当時、昏迷が三つ先の駅にあった更埴市の本屋の店員をしていることを発見した。日記から数多くの本や雑誌に接し、社会に対する批判的精神の芽生えが読み取れるという。その後の彼の足跡の手がかりは、この日記と病弱で療養先の上高地で知り合った夏目漱石門下の田部重治の著作にわずかに残されているが、「上京、苦学、そして中国への渡航という、ジャーナリスト丸山昏迷が巣立ちの時を迎えるに至るまでの期間、おそらくは貧乏神に悩まされ通しだったはずの、研鑽と彷徨の日々が詳らかにしえない」と山下は記している。田部の著作の中から上京後、社会主義の思想に染まっていく昏迷の姿がちらつくが、山下の調査、研究からは確認できない。

昏迷が1919年北京で発生した五四運動を現地で目撃したことは清水の証言などではっきりしている。山下の調査でも武者小路実篤が主宰していた雑誌『白樺』同年4月号到北京から昏迷が3口（一口1円）の寄付金を出していたことも寄付金報告に記載されているという事実が明らかにされている。そして、北京で発行されていた日本語雑誌『新支那』に丸山執筆の『人間の値段』という短文が「昏迷生」のペンネームで掲載されていたことも確認されている。

『新支那』には、同郷の麻績村出身の藤原鎌兄がいて、藤原の引きで『新支那』で働くようになったことがうかがわれる。1922年、藤原が『北京週報』を創刊すると丸山もそちらに移っている。藤原は1878年生まれ、清水や丸山より1世代上のジャーナリストである。日本国内で記者生活を送った後、辛亥革命の勃発した1911年、政友会の代議士に同行して訪中し、中国の混乱を憂え、中国の窮状を救いたいと、藤原はそのまま北京に残って『新支那』の創刊に関わった。

藤原自身は、保守的な思想の持主であるという。中国は欧米列強の侵略によって奴隸的な状況に置かれ、日中連携によって中国は欧米の支配から解放されると考えていて、日本の中国侵略についてはその可能性さえ疑っていない。例えば、中国を各国の共同管理の下に置くべきとする米国の主張に対して、それは日本を排除しようとする動きに過ぎないとして批判する。

藤原はまた中国自身の解放を求める動き、革命の動きも評価していない。五四運動の翌年に書いた文章では、「昨日支那側の有力者と会せるに今日は所謂国恥記念日であると云う。余の曰く彼の如きあんな日支協約にして国恥と云うならば、支那の国恥記念日は更に山の如く設けなければならぬ。其等は一際忘れて偶々日支協約のみを国恥と称するは抑も何の意であるか。余輩をして忌憚なく謂わしむれば支那の国恥は決して五七などに存せずして今少し大きなものにある。支那の現状其のものが世界に於る大国恥ではないか。全世界が新しき時代に入るべく改造の努力を尽しつつある時、支那は何の状であるか。南北の内輪喧嘩から始まって今では南々北々支離滅裂となって私利と私欲とを是れ競って居る。国家の統一はいずれの時回復し得らるや」²¹⁾と述べ、清水や丸山とは全く異なった評

価をしている。藤原の発想は当時の日本の大方の考え方であった。

しかし、藤原は一方では大正デモクラシーの申し子でもある。『新支那』は領事館などから支援があって運営されていたが、『北京週報』は日本政府や支那の各方面から支援も干渉も受けない「公平、自由、正確」をモットーに刊行された。政治的な立場や主張の異なる、意見の異なる清水や丸山も採用して、多様な言論を保障した。もともとは北京在住者向けの雑誌だったが、北京の日本人在住者は1000人前後だったので、その経営を維持するため、日本国内向けにも郵送で発行された。清水や丸山の活躍で、李大釗や胡適、魯迅、周作人など中国の一流知識人も執筆したので1万部にまで拡大したことがあったという。²²⁾

山下の問い合わせに妻のつたは「私は鎌兄と丸山が、どういうことで知り合ったのか知りません。彼は頭脳すぐれ、筆も達者でしたし、非常に熱心の努力家であったらしい。短日月の間に、支那の学問も支那語も、おぼえたと聞いています」「日本政府や支那の各方面からは、一切干渉を受けない。全くの公平、自由、正確。その立場が鎌兄の立場でした。丸山は左翼方面のうけもち記者として、署名の上、書いてもらっていました」「(北京週報は) 鎌兄と思想の違い等は関係なく、有能の青年を集めていました。」(前出山下論文)と回想している。

1970年代のアジア経済研究所の研究プロジェクトの一環で北京週報を分析した小島麗逸一(1972/37頁)は「藤原の編集方法の一つは、反対者の意見ものせることであった」と指摘し、その方針の下で「思想としては藤原と反対な清水、丸山を編集委員にかかえた」という。しかし、藤原自身は「中国と日本とは『共通の生命の上に生きて居る』という認識から、欧米から守ってやるという『支那保全論』をもっていた」と見る。

小島分析で興味深いのは当時の雑誌や記者の論調を分析する基準として「同時代に北京で生きた伊藤武雄が作った『北京満鉄月報』と比較しておくことが一つの評価の方法である。彼こそ大満鉄の保護のもとにいたからである」と述べている点だ。その上で伊藤の中国論を「大正デモクラシーが作り上げた日本の思想状況を通して始めて中国の近代を担った運動を理解できる人が生まれてきた」「軍閥の抗争や列強の中国蚕食の中でじっと次の春を準備する新しい民衆の息づきを感じ取っていた」(前掲42頁)と評価している。これに対し、北京週報について、小島は「経営的に日本権力、中国政府から自立していた『北京週報』は二つの面をもっていた。藤原に代表される顔と清水、丸山に代表される顔である。後者は、文学・思想面に限られたが、伊藤氏と通ずるものがあった」と、清水、丸山にも高い評価を与えている。

清水と丸山の論調は互いに影響し合っている。五四運動の評価について、丸山は当初、「多くの人々が群衆運動に訴えようとする時には、其集合する各人がいずれも完全、少なくとも完全に近いまでに自己を確立して居り、遠大の希望を抱持して居るのでなければ、其の運動は単に野次馬の騒ぎと化すのみであるが、現在の学生諸君に是非とも実現せしめなければならぬ、即ち変更することの出来ぬ確固たる理想があるとは思わぬ」(『北京週

報』1920年10月27日号）とかなり批判的であり、清水の手放しの樂觀論とは異なっている。しかし、2年後、李大釗を紹介する記事（同1922年9月17日号）の中では、「あの排日と云ふ国家主義一点張で起った五四運動が漸次単なる国家的見地から離れて人間的運動に進み、上海其他の学生会が何時迄も何んでも排日とさえ云へばよいと思って、全国学生会の名を持って罷課（＝授業ボイコット）を要望したのに第一に反対したのは北京大学であった」と評価が変わっている。実は全国の学生会とは異なる北京大学の動きについて、清水は、「支那最近の思想界——民衆運動の傾向」（『我等』1920年8月号）の中ですでに、授業ボイコットに反対した北京大学の動きに注目し、「北京大生の最初から持合わせていた思想が支那排日思想を純一にするまでには、一年間を必要としたのである。……まず排日の提唱に依って、全国的に勢揃いが出来、漸漸変挺（へんてこ）なる異分子を濾して、今日では純然たるデモクラシーの為の民衆運動に成上った。民衆運動が文化運動、民主運動に色換えするに従って、排日熱は低調になって来た。排日熱はやがて社会運動に燃えようとしている。支那学生達が排日に感興を失うに至るまでには、雑多な努力があったに相違ない」と評価していた。丸山の考えの変化が、清水の影響なのか、あるいは李大釗の影響なのかは不明だが、清水とかなり考えを共有していることに変わりない。

基督教を含めた宗教に反対する反宗教運動について、『我等』1922年6月号に書いた「支那反基督教運動の一考察」の中で、清水は、「新思想家として知られた周作人、錢玄洞其他六人によって、反反基督教運動が始まった。その理由とするところは宗教の自由を称し、思想の自由を合わせ唱えたのである。このあたりの消息は、読売新聞に現れた丸山昏迷氏の『文化運動としての反宗教運動』という通信文を見られたならば、最もはっきり解ると思う。同君の通信が何れの新聞にでたものよりも明確であったと記憶している」と、丸山の書いた記事を賞賛している。

戦後、藤原鎌兄とつた夫人が出版した『北京二十年』に序文を寄せた笠信太郎は『北京週報』などを舞台に展開された当時の中国論、日中関係論の意義について以下のように指摘している。

「日本と中国が、その切っても切れぬ間柄にありながら、その凡そ五十年の現代史のなかで、ともかくにも正常な国交状態を維持したのは、わずかに一九一二年（大正元年）の中国の第一次革命（三百年の清朝が崩壊して一応の共和制が実現した）から満州事変（一九三一年）までの、凡そ二十年間にすぎなかった。それ以後は、凡そ三十年間にわたって、戦争の暗黒とそれから今日に至るまでの空白の時代が、つづいている。この戦前の正常な二十年間というものは、日中国交史上ではむしろ特異な時代ともいえるのだが、しかしその中には、日本人の対中国感情の健康な一面がよく出ているし、その意味では、この中から貴重な経験を引出すことができそうに思える」

「当時、中国は、地方軍閥の跋扈で、折角の革命の成果は挙がらず、生まれ出るべきはずの近代国家はなかなか生誕に至らず、いわば苦しい産みの悩みの胎動期といっても

よかろう。……そこで日本は、その中国の近代国家への成長を、善意と同情をもって見守り、これに期待し、これに助言をすることのできる地位にあった。事実、日本はそういう風に動いていた」

「この時代は、日本と中国の数多くの有識者が、互に、両国の間を往来し、互い隣邦を研究しそして両国の前途にむかって理想の火を燃やした時期であった。『北京二十年』の筆者も、そうした日本人の一人であった。著者は、あたかもこの中国の近代国家への悩みの多い胎動期を、一言論人として、北京にあって中国を知ること深く、当時唯一の日本字新聞であった「新支那」と週刊誌『北京週報』を経営主幹し、前に私がいったあの時代の理想の火を日中両国の多くの人々の胸に灯しつづけたものであった」²³⁾

ただ、笠が描いた「中国の近代国家への成長を見守る日本」は、その後、中国の混乱を口実に中国に干渉し、中国を自国の国益拡大の場として利用する「侵略」の芽も内部に持っていた。清水たちはそれに対する批判の目も一方で持っていたという点でも「貴重な中国論」だった。だが、残念ながら、軍国主義の台頭にたちまち呑み込まれてしまうことになる。

藤原夫妻共著の『記者50年のうらばなし』は、「日本政府の対中国策は確たる目標も立たず、内閣の変わる毎に全然反対の政策を展開したり、軍人との二重外交をはじめたり、遂には軍刀の介入、圧迫、益々排日、排貨に拍車をかけてしまった」（つたの前がき）と回想する。そうした批判的精神を持つ『北京週報』はベースを北京に置くとはいえ、軍部が見逃すことはなかった。

「心血を傾倒した筆も遂に軍刀には勝てず、昭和5年（1930年）、日本政府の機関漢字日刊『順天時報』等も全部廃刊をさせられた」（前掲）。ただし、藤原夫妻はそれより3年前にこの雑誌から手を引いている。「大正14年2月鎌兄母の葬儀のため家族5人にて帰国し、久しぶりに日本の現状に接し、日本に於いて思想運動の急を感じたる鎌兄は内心本格的の帰国を熟考した。もはや中国に於いて日本の対中国政策の非を痛感し、中国内の混乱危険中に於いて公平自由正義性格の執筆は困難に向かって来たのである」、「その引き揚げの矢先、昭和二年四月一八日陸軍中佐、佐々木一到氏の『南方革命の真相』の書を我が社にて発行し、その新刊書は日本警察署を経て納本すべき規則を私は（経営の担当）知らず、納本せぬまま、一般に売り出してしまった。又其前に社の清水安三氏が南方へ革命視察して記事を『北京週報』へ連載したりで、我社は日本軍部の反感を買っていた。清水安三氏は『今に青天白日旗（革命の旗）が日本公使館の庭に、日の丸の国旗と並揚されるのに』と先見を言明した、等々で事面倒と鎌兄は一人で先に天津へ引き揚げて行って、私共を待っていた」（同217頁）とその経緯を明かしている。

停刊の時にはすでに丸山昏迷は亡くなっていた。彼はその死の1年前に1923年の12月から翌年1月の間に退社していたという。山下は彼の退社について「決して円満な転身というものではなかったらしい」と書いている。推測の理由として、「丸山の死に対して、『北

京週報』は短い死亡通知のほかには、一通の追悼記すら掲げていないのである。社主藤原鎌兄の寛容な性格からみて、そうした冷淡な措置は不自然としか思われたい」と述べている。筆者（高井）はそうした目で藤原夫妻の回想記2冊を読んでみたが、清水に関する記載はあっても丸山に関する記述は見つからなかった。それは山下の連載の中でもちらちら出てきた丸山の「社会主義者としての影」が関係しているのではないかと、筆者（高井）は推測している。

前出のアジア経済研究所の研究プロジェクトで、当時北京で発行された華字紙『順天日報』と『北京週報』を担当した飯倉照平（1972）は、1920年に結成された日本社会主義同盟の加入者名簿に支那北京大学内の李大釗と共に北京新支那社の丸山幸一郎（昏迷の本名）の名前が記されていると指摘した。さらに社会主義同盟の機関紙『社会主義』の第3号に、丸山昏迷名で、創刊号に掲載された大庭柯公の談話記事に反論する「支那社会主義に就いて」と題する文章も書いていたと明らかにしている。また山下（前掲）も1921年4月に丸山が「東亜新聞大会」に『新支那』代表として出席のため帰国した際、特高がずっと彼を尾行していたとも記している。

さらに決定的なことに、狭間直樹（1992／366頁）は、当時の内務省の要視察人一覧名簿に、丸山が「1916年暮れに上京し、中央大学英語科夜間部に通う傍ら、大杉栄や堺利彦ら『主義者』と交遊し、要視察人の乙号に指定されるに至ったとの記載があることを明らかにしている。「かれが中国に渡った時期は明らかではないが、渡った後も日本の社会主義運動と連絡を保ち」「李大釗の日本社会主義同盟加入の手引きをしたのは丸山である」と言ってほぼ間違いなかろう」と狭間は指摘する。とすれば、北京において憲兵隊などが藤原社長に対し、警告を放ち、丸山を切らざるを得なくなったという可能性が高い。

実は、清水も後年、李大釗のために堺利彦の「平民新聞」の購入に便宜を図っていたり、アメリカに留学の際、李大釗に頼まれ、アメリカ共産党の宣伝パンフレットを届けていたと回想²⁴⁾しているから、二人は筋金入りの「ラジカル」だった。

7. 「北京の聖者」としての発言

関東大震災に伴う正力松太郎の読売新聞買収、軍部の介入による北京週報の停刊で、清水はジャーナリストとしてのそれまでの活動の場を失う。一時的に国民新聞の特派員として、北伐途上の蒋介石国民革命軍総司令に単独インタビューしているが、評論活動ではない、ニュース報道は性に合わなかったと回想している。それだけでなく崇貞学園の発展に伴って、学校経営の方が多忙になる。その資金稼ぎのために帰国して同志社大学の講師となったり、またメンタームの近江兄弟社の中国駐在セールスマンを兼務したりと次第に評論活動からはなれていった。

読売新聞のデータベースで清水安三の名前が復活するのは1935年、当時の「女子新教育運動」のリーダー、青山学院教授、「小泉郁子女史が43歳で独身に終止符」という記事の

中で、その結婚相手として登場する。清水は妻、美穂との間に二男一女を設けたが、二年半前に美穂は病没した。清水と小泉郁子は米留学当時の同級生であり、その後も家族ぐるみのつき合いがあった。清水は小泉郁子に北京から求婚の手紙を送った。北京での学校経営に興味を持つ郁子は、結婚を受け入れた。再婚後、崇貞学園は単なる貧民救済の学校ではなく、日本政府認可の正規の女学校に生まれ変わる。清水は学園の大増設に乗り出し、ますます多忙になるが、その一方で『朝暘門外』（朝日出版社）など毎年のように本を出版している。それはジャーナリストとして事実問題を扱った評論ではなく、自身の体験を綴った自伝的エッセーである。

1933年の満州事変、37年の日中戦争の勃発で、日本が国際社会で孤立を深めて来ると、北京で中国の貧民救済や学校経営をしている清水を、日本政府は「北京の聖者」として持ち上げ、世界に宣伝を展開するようになる。

1939年2月22日付の朝日新聞は「『北京の聖者傳』成る」の見出しで、「北京の聖者として事変下の全支民衆に慈父の如く崇敬されている『崇貞学園』主、清水安三牧師（48）の伝記が今回外務省の情報部の斡旋で完成、近く日本語及び英語両語版を刊行し世界へ隠れたる『聖戦下の聖人』の姿を宣揚する事になった」と報じている。記事は伝記出版だけでなく、清水の北京での活動ぶりやそれが中国人のみならず欧米宣教師の賞賛的になっていると詳しく紹介している。清水は「聖者」として祭り上げられただけでなく、学園には外務省の補助金、果ては天皇陛下からの下賜金まで授与された。立場の変化もさることながら、さらに時代の変化、世論の動向にも彼の発言は左右されるようになる。北京週報時代のような歯切れのよい評論は書けなくなってしまう。それこそ「非国民」として弾圧の対象になってしまうだろう。大正デモクラシーが生んだ様々な中国論のうち、「大満鉄の保護の下にあって」評価軸になると、小島麗逸が指摘した満鉄調査部の伊藤武雄らのグループさえ検挙され、まともな裁判も受けないまま収容所を転々とさせられ、獄死する研究者も出た言論弾圧の時代下にあった。

読売新聞のデータベースに戻ると、再婚のニュースの後は1938年12月22日から始まる「大陸文化工作の第一線的人物」連載の第1回で、「紫禁城下の聖者 清水安三先生」として登場。さらに翌年3月7日には「東亜協同体と日本 日支文化検討 清水安三氏に訊く」という清水を囲んだ座談会記事がほとんど1ページを使って掲載されている。

「いま、日本のやって居る仕方は支那を楽観して、即ち支那人も一つの重要な協力者として、山を拓くにも河を治めるにも鉱山を開発するにも日本人ばかりでなく支那人を入れると云う東亜協同体の方針となりつつある。それで今の所では私が思うのにそういう日本人の性質だからこれは最早是非を超えた運命じゃろうと思う。大きな大陸の自然資源をもっている四億の人間と協力して、一つのリーダーシップを執って、東洋文化建設に突進するというようなことにならざるを得ない運命を背負わされていると思うのです」

「支那の国民は日本人から受けるべき点、学ぶべきところは沢山あります。そのうちの最も大事なことは日本人はやはりフレッシュな力をもっている。ちょっと見ると支那人の方が社交的でリファインされていて直ぐ喧嘩などせぬし、更に日本人に比し信用もできる。金を貸しても返すし、青年でも日本の青年は乱暴です。まあそういうような点はあるけれども、支那人よりも日本人の優れている最も大事な点は自己を忘れるということ、恥を知るということ、向う意地があり、気力がある。この点において、支那人は負けるのです。その気力に支那人が説服されればいいけれども、まあされなくてもその気力によって東亜建設ができるでしょうな」

新聞の座談会記事というものは筆記した記者の主観がかなりこめられるから、この発言通りに清水が考えていたかどうか断定できない。「運命」とか「気力」を持ち出し、字面をそのまま受け取れば、北京週報の藤原社長の「支那保全論」に近づいてしまった感もある。それでも本心がどこにあるのか、のらりくらりと「聖者役」を果たしているようにも見える。その一方で中国人の能力も評価し、逆に日本青年の暴力性を批判している。

座談会記事のわきに「清水安三の聖者弁」という興味深いコラムが掲載されていた。

「近頃、誰でも北京の基督とか紫禁城の聖者とか呼んで敬意を表しているが御本人はこの聖者という言葉に冠せられるのが甚だ気になると見えて各方面に『聖者』取り消し運動を講じているほどだ。ところが先日子供がお父さんは耳と口の王でしょうと云ったので、ああ如何にもそうです。これならいい。と聖者改めて耳と口の王になったことである」

このコラムを見ても、清水にとって、聖者の居心地はよくなかったことがわかる。他の文章の中にも同様の心境の記述が見られる。「耳と口の王」とは、ジャーナリスト清水にとって、最高の贈り言葉だったに違いない。決して大陸侵略の先兵役を果たしているわけではない。この時期、単独の論考として中央公論に集中的に発表している。1937年2月、4月、11月、12月。日中戦争の勃発の年で、北京在住の清水に久々に執筆のチャンスがめぐってきたのだろう。「雑誌記事索引集成データベース」で見ると、清水の執筆には1920年代と1930年代後半の二つのピークがあり、1920年代は年間平均20本ペース、30年代後半は10本ペースである。これらの論考を読むと彼の屈折した心境を読み取ることができる。

軍国主義に覆われる時代、大陸戦場での日本の快進撃に酔う世論、“北京聖者”としての立場から、その侵略性を批判するどころか、むしろ日本のリーダーシップによる「東亜協同体」、「日支親善」を前提に議論している。しかし、そうした議論においても清水らしい発言も見ることができる。例えば「その後の蒋介石」（4月号掲載）という論考では、西安事変の意義を以下のように述べる。

「どんな意味において、画期的事変であったかというに、それはいうまでもなく民国支那が、内争時代を完了して、実に統一時代に入ったという意味においてである」「そのことが直ちに『容共』とまで進展するかどうかは今後の問題であるが、もうお互いに内争は止そうということになった」

にもかかわらず、日本はどうかと反省を求める議論も展開している。

「祖国日本からの来遊者の言に聞けば、日本は明治大正を絶頂にして物質的繁栄は兎も角、精神的に下り坂だとのことである。坂を下るのは足が速い。上るのは嘗々頗る慢々的ではあるが、気が緊張しているものである。隣邦支那に恥じよと叫ぶものは必ずしもわたくしばかりではあるまい」

その上で日本の対中国政策についても、ストレートではないが、以下の3点を挙げて、批判の目を向けている。1、日本国民は未だ支那語をマスターしていない、国民的にマスターしていない。(支那語と言っているが、それまでの議論の流れから言って中国の変化を理解していないということを暗喩している・・・筆者) 2、日本人は支那人を動かすコツを体得しておらぬ。支那には支那流というものがある。どこを押しても、ベルがじいじいとなると思ったら大間違いである。対支・・・政策などやったって駄目。('・・・')は伏字になっている。一撃論とか推定するしかない) 3、日本人は移り行く支那を認識することが、実に不得手である。大衆の動きを見極むことが下手である。

こうした論考にも伏字が見られるように、言論統制が進む中でも、さらに批判的精神を発揮し、提言も行っている。

「権謀術策、小細工でやろうと思っても駄目。『正直』という点ならば支那人は日本に適わないが、小細工なら支那人の方が役者が一枚も二枚も上だ」「独立評論で胡適がいつている。日支親善打開は利益を相互共にする点を勘考して、そこには協力を個人的に進めるより外に仕様があるまい。実業家は実業家で、学者は学者で、民間的に個人的に、相利相益の場合、機会をとらえて進むより外に致し方あるまい」

近年、悪化するばかりの日中関係の中で、「ウィンウィンの関係」「多チャンネルの関係構築」が叫ばれているが、清水は戦時下においても同様の考えを明らかにしていたということになる。

また「支那事変の見透し」(同11月号)という論考では、盧溝橋事件が共産主義の影響下にある学生連合会が仕組んだものとの清水が得た独自の情報から、日支事変の目標が「暴戾なる支那を膺懲するというよりも、支那を共産主義より救うという意義になって来た」と分析し、事変を肯定的に捉えている。しかし、読み進んでいくと、「支那を日本人

の心で以て判断してはならぬ」「希望と予測とは必ずしも一致するものではなく、日本の支那通の予測はかつて、当たったことがない」「日本人はむしろ支那を予測することを止め、日本として如何に処すべきかを、考慮すべきである。支那の出様よりも、日本のやり口を眺めて、多分日本はどうするであろうと見透しをつけるのである」「支那兵は昔のチャンコロ兵ではない。「好鉄不打釘、好人不当兵（いい鉄はくぎにせず、いい人は兵にならない）」といわれた支那兵とは格段の相違である。もう到底、日本の一個小隊で、支那の一師団を走らせるというわけには行かぬ」「日支人は朗らかに提携し行けることが明らかになった以上、先ず北支五省が、日支提携、防共を看板とする自治政府を建設したならば、それで事変を一段落つきしものと満足すべきである」と述べている。中国が統一に向かい、兵の質も向上している事実に向け、日本側の抱える問題も指摘し、戦線の収拾を求めている。以上のように清水の発言を詳しく見て行くと、言うべきことはしっかり言っていることもわかる。次節で見るように、その姿勢はハワイをはじめ、アメリカ本土、カナダを回って、講演会を開き崇貞学園の拡充のための資金集めをした時も同様である。

栃木利夫（2001/47頁）は「1937年の日中戦争開始頃を境とする変化、1920年代と比較しての『落差』は何故かが、一つの疑問となる。1930年代後半からの論説と評論には、慎重な検討が求められる部分もあると思われる。とくに日本の軍事的支配が強まる華北・北京で日本人と共に中国、朝鮮の子女が学ぶ学園経営を維持するためには、軍部関係者との交流も必要であったと、推定できる」と指摘する。

8. ハワイ舌禍事件の深層

清水は1939年末から約半年間、崇貞学園の運営を維持するための寄付金集を目的とした北米の旅に出る。日系人を主な対象に、各地で講演会を開き、中国問題、日中関係などを論じて寄付を募った。ハワイでは邦字、英字で発行していた「日布時事」新聞社の全面的なバックアップで50回以上の講演会を開き、この新聞に自身で連載を17回掲載し、また講演会について、同社の社長、相賀溪芳をはじめ記者たちも沢山の記事や論評、講演の記録を掲載した。それらの記事は「雑誌記事索引集成データベース」に含まれていない。当時の清水の考え方を知るにはやはり欠かせない記事である。幸い筆者は、桜美林大学の樽松教授が所蔵していたその当時の「日布時事」のマイクロフィルムを借りて読むことができた。オーシロ・ジョージ（2001）はこの新聞だけでなく、カナダの新聞も分析して、清水の当時の言論を論評している。

1940年1月15日付の『日布時事』は前日ホノルルで行われた講演について、「北京の聖者、清水安三氏 愛の日支親善を力説」との見出しで、詳しく講演内容を報じている。この講演録では（英の中国侵略の歴史を指摘した上で）「元の東亜に戻すこと、即ち支那五千年の歴史を基調にして、新東亜の建設を完遂する事こそ、日支両国民に課せられた最

大責任である筈」、「今や支那はその好むと好まざるに拘らず、日本の協力なくして滅亡より救われる事は出来ないであります。私は真実に支那人を愛しています。しかし彼等国民が総ての点に於て国家的に見て下り坂に在ることは事実であります」、「今こそ支那国民は永い過去の惰眠より醒め日本と真に協力すべきときであります。しからば果して日支は協力し得るか、この問ひに私は躊躇することなく“然り”と答へます。勿論彼等は尊大な国民ですから向ふから頼むなぞ殊勝な事は言つて来ぬでせうが、また日本としても彼等を味方としなくては、新東亜建設の大業は完成困難で有ます」と述べ、日中戦争の大義を全面的に肯定している。これが彼の本心であったかどうか、議論が分かれるところであろうが、日系人社会も日本の対中進出を全面的に支持している中で、寄付金募集の講演をしているわけだから、こうした発言となるのはやむを得ないとも言えるだろう。

むしろ「日本としても彼等を味方としなくては、新東亜建設の大業は完成困難」とした講演の後半に注目してみると、「昔は一人の大將を懷柔すればそれに国民はついてきましたが、今はそうでなく、民心を把握するのでなくては駄目です。それ故、汪兆銘を後生大事にするよりは、先づ大衆を日本に心服さす事こそ肝心であります」、「しからば如何にすれば日本が支那民衆の心を完全に掴む事が出来るかと言へば、第一日本政府並びに役人が公明正大であり、彼等から尊敬される迄になる事、第二には民間の一人一人が宣撫班の積りで、彼等に暖かい手を差し延べてやり、双方の心と心が完全に融和されるのでなくてはなりません」、「支那を救ひ真の日支提携の基をなすものは、力ではなく愛の恵みでなくてはなりません。政府当局がしばしば声明せる如く日本は支那に対して毫も領土的野心はなくこれと協力して俱に繁榮したいと願っているのみであります」と、決して全面的な肯定ではなく、現状批判の意図が込められている部分がある。

一連の講演で最も注目されるのは、南京虐殺事件に関する清水の議論である。清水は聴衆の疑問に答える形で、1月17日から17回に渡つて日本語版に「支那事変問答」という連載を掲載した。そのうち22日と23日に掲載された「大陸に行ける日本人は、どうしてあんなにラフなのでせう」という問答の中で、所謂「南京虐殺」事件についてその発生を認める発言を行い、大きな波紋を呼んだのである。

「支那の婦女が、狂犬に噛まれしが如くに、遭難したといふ噂は、本当に我等と雖も、切齒せねば居れぬ報告であつた。特に、遺憾であつたのは宣教師の保護している学校の避難所に集まれる婦女が遭遇せしことだつた」と日本軍の悪行狼藉の存在を認めた。と言つて、清水は日本軍を全面的に批判したわけではない。むしろこのような事件は戦争につきものだと指摘し、さらに「1927年2月の南京事件に在りては、蒋介石が九江から指揮していたにも拘らずその部下何健が率いる正規軍が、南京に入城した際、それが内戦であつたにも拘らず、支那兵は各国の領事館に侵入し、ミッションスクールにも乱入して、日本の婦女も悉く遭難し、米国の女性宣教師も遭難した」とまで書いている。「何しろ、人を殺すといふことが、人間の犯し得る最も大きい罪惡である以上、それをやってやりぬくのが戦争である。略奪だの婦女を虐めることは人殺し以下の罪惡である。然らば戦場でいろん

なことが行われるのは無理なことである」と肯定さえした。

それでも清水はハワイの日本総領事館に呼び出され「すぐ帰国せよ」との厳しい指示を受ける。日本政府が、南京事件の存在自体を否定することはこの頃からすでに始まっていた。清水は後年、こう回想している。

「南京事件の如きを隠さんと欲しても、到底隠しおおせるものではない。しからば少しでも弁解を試みるのが、国民の義務であると思ったからだからこそだが、私がはっきりNOと答えなかったことは、大きいセンセーションを巻き起こしたらしい。在留同胞らは『日本の兵隊に限って、そういう乱暴は決してせぬ』と信じている。再びYESかNOか。どちらかひとつで返答せよと迫られた。NOと答えんと欲しても、良心が許さない。私は沈黙して答えなかった。領事館に出頭を命じられた。領事は送還を命じる、米大陸へ渡航は許さぬといいだした。私は夜な夜なワイキキの浜の椰子の木にもたれて、泣いて神に祈り、ついに決心した。『ここは米国、領事といえども、私を捕えることはできまい。横浜に帰りつくと同時に捕らわれ、獄にぶちこまれようと、構うことはない。よし行こう』。こっそり米船でハワイを脱出し、何食わぬ顔をしてロサンゼルスに上陸した」(昭和23年『希望を失わず』)

清水の次男、畏三氏は2016年に行った講演で、父親を「反骨のジャーナリスト」と評価し、以下のような事実を明らかにした。7月1日 横浜に帰着。北京ですでに一日留置の憲兵隊の調べを受けていた郁子夫人が急きょ帰国して、横浜で夫に北京での出来事を報告。それで清水は宇都宮に直行し、滋賀二中の先輩、喜多誠一中将に一部始終を報告し、善後策を相談した上で北京に戻った。北京では30日間連続の取り調べを受けるも留置はなかった。アメリカで集めた寄付金の2万ドル(17万円)のうち10万円を軍に寄付して事件はうやむやになったという。

9. 日和見主義評価の問題点——結論に代えて

オーシロ・ジョージ(2001)は、北米での講演を分析した上で、清水に対し厳しい評価を与えている。

「当時の日本では中国を蔑視する風潮があまりにも強く、安三もこの影響から逃れることはできなかったと思われる」(オーシロ60頁)

「安三は日和見主義者であったと言えなくもない。中国での長い活動の結果、有名になり、それを徹底的に利用したのだと。彼には敵もいた。何事も大げさにいう「ほら吹き」とも呼ばれた。しばしば状況判断を誤った。彼の中国に関する発言の中には、信憑性を欠く説や、浅薄な分析、おおざっぱな一般論など多くあることも確かである」(同61頁)

とくにオーシロは、カナダ・バンクーバー、『大陸日報』の1940年6月3日講演を扱った記事の中で、清水が「私も日本人である。日本人としての優越感がある。然し私は支那人には見せない、我々はクリスチャンである前に日本国民でなければならぬ……」と述べたことを取り上げ、「安三はキリスト教の博愛の精神に基づく立派な道徳的活動と中国にキリスト教を伝道しようという親善の精神を持っていたにもかかわらず、無意識のうちに戦前の日本にはびこっていた中国と中国人に対する差別意識も持っていた。安三個人の、また、日本全体の悲劇の原因がここにある。このような考えを持っていたことが、韓国と中国大陆に対する日本の帝国主義的行動の大きな原因であったし、太平洋戦争で敗北して叩きのめされる原因となった」(同60頁)と断じた。そして、清水が幼年時を振りかえって書いた次のような文章を引用する。

「3, 4歳の頃、姉に背負われて、村の若者達が中国との戦争に出陣する様子を見た。そしてその頃、子供たちが歌っていた歌を思い出して書いている。

ちゃんちゃんぼうずの首きって

李鴻章の鼻べっちゃ

ちゃんちゃんぼうずの首きって」(『石ころの生涯』)

しかし、オーシロの分析はあまりにも皮相的だ。そもそも『大陸日報』の記事は長い講演の一部を記者が切り取ったもので本当に清水がそう語ったかどうか、検証の必要がある。例え言ったにしても、清水が幼児のころのステレオタイプな中国観を引きずっていたかどうか大いに疑問がある。先に引用した清水の文章を見ても、中国の兵士はいつまでも「ちゃんちゃんぼうず」ではないとはっきり書いている。確かに中国人に対する批判の気持ちは持っていた。しかし、それはステレオタイプではなく、清水が実体験や取材を通して自身が形成した中国観である。そもそも魯迅や李大釗らは、中国の現実に対する強い批判を持ち、革命的精神を訴えた。中国に対する批判や失望感を持ったから、それが即差別意識ということにはならないだろう。1920年代以降の彼の評論をきちんと分析すれば、そのような結論はでないはずだ。もちろん、彼の中国論に変化がなかったわけでない。批判的に読むことも当然必要だ。だが、その分析は、それぞれの時代背景や中国の事情、日中関係の状況を踏まえた上で、進められねばならない。現時点から見れば、日中戦争は確かに侵略戦争であり、批判されるべき出来事であるが、その渦中であって、その当時、そう発言することがどのような意味を持つのかを理解した上で結論付けるべきであろう。

さらに彼を軍国主義に妥協した日和見主義と一方的に批判することは、彼が1920年代から展開してきたジャーナリズム活動の意義を見誤ることになるし、日中戦争勃発後の評論に込められた清水の真意を読み違えることにつながる。清水は思想家や政治指導者ではなく、教育実践者、ジャーナリストとして活動した。現実と戦いながら、時に妥協もしながら、その改革に向けて闘い続けてきた。妥協の一面だけを取り上げるのは酷である。清水

が大正デモクラシーという背景の下で、日本国内の中国に対する侮蔑的なステレオタイプと戦いながら、中国の現地で当時の中国の指導者や諸運動のリーダー、そして庶民と直接触れ合い、そのネットワークを通して中国論を構築したこと、また戦時中は圧倒的な軍国主義とそれを支持する世論に対してぎりぎりの抵抗を試みたことをきちんと評価する必要がある。ハワイの領事館の警告を無視して講演行脚さえ継続した。日布時事の有賀社長は、南京事件をめぐる清水の発言がハワイで物議を醸した時、自ら論陣を張って、清水をこう擁護した。

「日布時事紙上での『支那事変問答』の中で、南京陥落当時に於ける所謂日本軍の不始末事件の噂に就いて論ずるや、大分八釜しき非難が聞こえて来た。阿片問題に就いても、ああいう風にかかなくても好いだろうというような議論もあるようである。此等の非難攻撃を為す人々の大部分が、いづれもみな熱烈なる日本の愛国者である点に於いては、わたくし自身何等の疑いも挟んでいない。清水氏自身も日本の臣民の一員として、故国の此の非常時局に際して、一片の赤誠を致さんとして居り、わたくしなども微力ながら同じ立場に立つ者である。若しわれわれに幾分異なるところがあるとすれば、余りに狭量なる愛国主義を排することでありそれが却って国家を毒することを信じている点である」「事変以来日本からアメリカへ来た国民使節の数は随分多いが、日本の立場を宣明して、真実の日本の主張を、米人に納得せしむる上に於いて、いづれもみな大した成功を上げることが出来なかった。日本から宣伝用のパンフレットや小冊子は山のようにならされたが、それとても大した効果はなかった。今までの日本のやり方は、少しでも自国の短所欠点と思われることは、出来るだけこれをかくして、抽象的の理屈のみで押し通そうとする傾きがあり、それが米人の頭にびったりと来ぬ所以であった。しかし何事でも表裏両面の真実を語らずして、先方の了解を得んとすることは、不可能である。わたくしは清水氏が南京に於ける所謂日本兵の不始末事件の噂に就いて論述せしことを以て、或る一部の人士がいうように、皇軍の威信を毀損したものとは、どうしても考えられない。況や阿片問題に由って起こった歴史と日本の方針を示したことを以て、国威の軽重を問われるものとは、断じて思わない」²⁵⁾

有賀の擁護論には言論人としての矜持が感じられる。日中関係が同様に危機的な状況にある現在、日本の中国報道には、中国の現状から出発せず、中国を遅れた理解できない国、野蛮で危険な国といったイメージから、そのイメージに適った情報ばかりを伝える報道が目立ち、関係の悪化をメディアが演出するというそれこそ危険な状態が続いている。事実を軽視した「狭量な愛国主義」「国益中心」の報道からは真の国際理解は生まれない。清水が中国を問題にする時、一方では自身を、日本を振り返ってみる視点を必ず持っていた。事実を多様な側面から検討する姿勢を貫いた。この点で、清水や有賀の報道姿勢、中国論から学ぶところは大きいと私は考える。

注

- 1) 公益財団法人・新聞通信調査会発行『メディア展望』2016年7月号
- 2) 桜美林大学『中国文学論叢』第1号
- 3) 支那の呼称は当時、一般的であり、清水は処女作ともいうべき「支那生活の批判」(雑誌『我等』1919年5月号)の中で、中国は人種や民族差別に染まっておらず、「支那人という名称は、世界人という言葉と同種同意似ておる」とまで述べ、この言葉に差別的意図を持っていない。
- 4) 1922年2月10日付
- 5) 1920年3月18日『基督教世界』
- 6) 1927年7月31日号『北京週報』
- 7) 例えば、山根幸夫「日本人の中国観——内藤湖南と吉野作造の場合」(『東京女子大論集』19-1、1968年)
- 8) 毎日新聞社『大正という時代』19頁
- 9) 『石ころの生涯』47ページ。この記事は現在の朝日新聞のデータベースでは見つからない。
- 10) 『桜美林物語』(桜美林学園、1962年)前付3～4頁
- 11) 『朝陽門外』93頁
- 12) 『桜美林物語』1962年版前付
- 13) 『朝陽門外』100頁
- 14) 『桜美林物語』1962年版前付
- 15) 『読売新聞八十年史』(読売新聞社、1955年)
- 16) 『朝陽門外』101頁
- 17) 『満鉄に生きて』88頁
- 18) 『北京週報』の前身
- 19) 『我等』1919年12月号
- 20) 『魯迅全集』第14巻(人民文学出版社、1981年)
- 21) 小島麗逸『革命揺籃期の北京』「真の国恥記念日何れにか存する」130頁
- 22) 『記者五十年のうらばなし』120頁、小島(1972)33頁
- 23) 『北京二十年』5頁
- 24) 『石ころの生涯』所収「李大釗先生の思い出」227頁
- 25) 「日布時事」1940年2月3日付

参考・引用文献(本文内で出典を詳述しなかった著作、論文)

〈著書〉

- 相賀溪芳『五十年間のハワイ回顧』(同書刊行会、1953年)
伊藤武雄『満鉄に生きて』(勁草書房、1964年)
樽松かほる『小泉郁子の研究』(学文社、2000年)
衛藤藩吉『鈴江言一伝』(東京大学出版会、1984年)
小島麗逸『革命揺籃期の北京』(社会思想社、1984年)
阪谷芳直『中江丑吉の肖像』(勁草書房、1991年)
竹内 好『日本と中国のあいだ』(文芸春秋社、1973年)
張競など編『共和の夢 膨張の野望』(岩波書店、2016年)
毎日新聞社『大正という時代』(毎日新聞社、2012年)
藤原鎌兄『北京二十年』(平凡社、1959年)

藤原鎌兄・つた共著『記者五十年の裏話』（非売品 1975年）

吉野作造『吉野作造選集』7、8、9（岩波書店、1995～96年）

山根幸夫『大正時代における日本と中国の間』（研文出版、1998年）

桜美林大学清水安三記念プロジェクト『清水安三の思想と教育実践』（桜美林大学、2001年）

〈雑誌論文〉

飯倉照平「北京週報と順天時報」（『朝日ジャーナル』1972年4月21日号、朝日新聞社）

オーシロ・ジョージ「戦前期における清水安三の国際主義と愛国心のジレンマ」（桜美林大学清水安三記念プロジェクト『清水安三の思想と教育実践』桜美林大学、2001年）

小島麗逸「『北京週報』（1922年1月～1930年9月）と藤原鎌兄」（『アジア経済』1972年12月号、アジア経済研究所）

栃木利夫「中国現代史と清水保三」（桜美林大学清水安三記念プロジェクト『清水安三の思想と教育実践』桜美林大学、2001年）

狭間直樹「中国国民革命の研究」（『マルクス主義の伝播と中国共産党の結成』／石川禎浩、京都大学人文科学研究所、1992、3）

山根幸夫「日本人の中国観——内藤湖南と吉野作造の場合」（『東京女子大論集』19－1、1968年）